

## 母は昔パパだった

赤ちゃんは、唇を閉じれば出せる、パー、ムーなどの喃語(なんご)から始まり、成長するにつれて精密な発声を覚えていきます。

実は、日本語自体もそのように成熟してきたのです。うそのような本当の話ですが、母は今「ハハ」と発音しますが、ひらがなやカタカナがまだなくて、万葉仮名(例えば春なら、波流、と書く)が使われていた奈良時代には「ファファ」と発音されていたことが万葉仮名の分析から明らかにされています。「ハハ」よりも軽く唇を使っています。幼児にとっても唇を使わない「ハ」は発音しづらいのです。

ということは、奈良時代以前の上代日本語は、「ファ」よりももっと唇を使っていたものと推測されています。発音しやすいその音、それは「パ」です。ですから、パパ→ファファ→ハハ、となったというのが定説で、江戸時代にハ

ハに変わったとされています。

父をパパと言う現代の私たちが「母がパパだった」なんて聞くと、一瞬混乱してしまいますが、パパもママも、幼児には発音しやすい言葉なんですね。

蛇足ですが、五十音のヤ行とワ行には今は使われない、発音されない字があったり(み・牟、ゑ・エ、など)、タ行は今と発音が違っていたり(ち、はティ、つ、はトゥ)したのです。

赤ちゃんに話を戻すと、ことばの発達には個人差がありますが、まず、規則正しい生活をする、次に、体の発達にそった十分な運動をすること(寝返り、はいはい、あんよ、など)、そして、心の安定を図ること(おっぱいやミルクを飲ませる、オムツを替えたりお風呂に入れたりする、抱きしめる、など)、この三つに注意すれば十分だと言われています。

\* 臨床心理士の講話より (N.T)

## ☆いよじょのしゃべり場☆

3月25日(水)

13:00~

伊予市総合保健福祉センター3階  
みんなくるボランティアスタッフルーム  
今年度最後です♪♪  
おしゃべりしませんか♪



伊予市子ども総合センター  
総合保健福祉センター2F  
☎989-6226

## 適応指導教室「はばたき」～「勉強が分かると元気が出るって本当？」

最近、小・中学生の中には、「勉強が分からないから勉強しない。どうせ勉強しても成績が上がらないので、どうでもいい。」などと、自分で努力して勉強してみようという意欲をなくしたり、学習することをあきらめてしまったりしている子がいます。

そこで、まず本教室では教科書を読み、問題の解き方を自分でしっかりと見つける学び方を教えています。教科書を見て解き方が分かったら、自分のノートに実際に例題を解いていきます。やり方が分かってくると、例題をどんどん解くうちに理解できるようになってきます。

何をどう手を付けていいかわからず勉強しないと言っていた子も、問題解決の糸口を見つけると、「やったあ。できた。もう一つやってみよう。」と自分で問題を解き、意欲を見せるようになってきました。

子どもたちに問題が解けるようになった喜びをつかませ、何よりも「分かるようになった」と、学習への意欲や勉強してみようと思わせるきっかけをつくるのが大切だと気づかされました。

お子様の不登校や適応指導教室に関する相談の連絡先(電話番号089-989-5022 直通)

この言葉は禅語で雲門禅師の悟りの境地を現した最高の言葉で、その日一日をただありのままに生きる、すがすがしい境地ということです。嵐の日であろうと、何か大切なものを失った日であろうと、ただひたすらありのままに生きれば、すべてが「好日」なのです。なかなかこの境地には至りませんが、目の前の現実が喜びであろうと悲しみであろうと、ただその一瞬を精一杯に生きることでしょうか。

森下典子による自伝エッセイで『「日日是好日」「お茶」が教えてくれた15のしあわせ』を原作として、樹木希林が出演して話題となった映画の題名でもあります。この映画を見て私の友人2人がお茶を習いはじめました。

私はその少し前からお茶のお稽古に行っていますが、その映画を見てますますお茶のお稽古が楽しみになりました。お茶のお稽古をしていると、季節の移り変わりがよくわかり、寒さや暑さも楽しみに変えてくれます。茶や炭や香(こう)の香り、窯から湯を注ぐ音、水を窯にそそぐ音、それらを感じつつお稽古をしていると、過ぎた日や明日の悩みや不安もどこかにおいて、「今・ここ」に集中することができます。お稽古のために用意された茶室の掛け軸や花など、先生の思いが伝わり、心も癒され心地よいひと時です。

「今・ここ」に注意を向けることが生きる力となっているのがわかります。(T)

### 《センター長のつぶやき》

#### 「お母さん大丈夫よ」

先日私は、成田空港第3ターミナルにいた。近くに赤ちゃんを抱いたお母さんがいらした。赤ちゃんが「ぐずり」はじめてあやすものの、移動のバスで泣きはじめた。機内でもエンジン音が響き、気圧も変化し、泣き止むことはなかった。お母さんは、何とかしようと思死であった。私は心の中で「お母さん大丈夫ですよ。だれもが通った道だから、そんなにも気にしないで大丈夫ですよ。周りの人も、嫌な顔をしないでくださいね。」と願うことしかできなかった。

松山に到着。近くに座っておられたご婦人が、降り際に温かな眼差しで、赤ちゃんとお母さんを見つめておられた。安心が広がった。きっとご婦人のお子様もよき社会人となっておられることだろう。

先日の研修会で、玉井利江先生が話されたことがよみがえった。「自分のメンタルヘルスが良好でなければ、人を支援するのは難しい。」「0歳から1歳半までの乳児期は、愛着形成にとっても大切な時期。特にお母さんの役割が大切。」と。空港ロビーでは、先ほどの赤ちゃんが静かに眠っていた。そこには、お父さんらしき人と、お母さんの安堵の笑みがあつた。「どうか幸せになってくださいね。」と足取りも軽く飛行場を後にした。(DOIG)

### 《発達支援巡回相談》

#### 「1年がたちました」

当たり前と言われそうですが、4月のころを思い返すと、どの子どもぐっと成長をしたと感じられます。当初は担任の先生方を困らせていた子ども落ち着いて生活ができています。先生にお聞きすると一様に「特別なことは何もしていません。」と言われます。

先日、研修会で「子どもは困っているときにそばにいる大人が抱きとめてくれることで安心して成長できる。」と教わりました。先生方は泣いている子を抱き寄せて「どうしたの? ~だったんだよね。」と話を聞いて、次の活動に誘ってくれます。この日々の積み重ねで子どもは安心して成長できるのでしょうか。この安心感の積み重ねが、1年たつと大きな成長につながっているのです。

どの子ども大きく成長した1年でした。育児に関わる方々の1日1日の積み重ねに頭の下がる思いのする年度末です。

(A)

